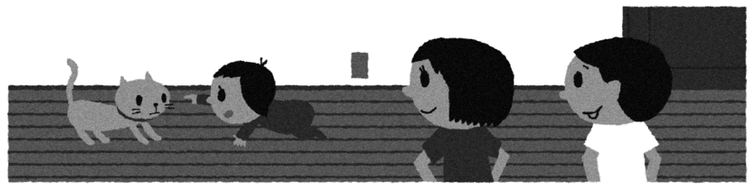
変わる日本の「暮らし」と「まち」 no.54

住宅が建ち、店が開き、人が集まる 復興の第二ステージの開幕

宮城県気仙沼市・鹿折地区被災市街地復興土地区画整理事業（2012年～）



阿部民子
Abe Tamiko
illustration：Shigeyuki Sakata

日本の秋の味覚を代表するサンマ。その水揚げ量で、毎年上位に名前があがるのが宮城県気仙沼市だ。豊かな恵みをもたらす海が一転、牙をむいた東日本大震災では、気仙沼市も激烈な被害を受けた。なかでも、気仙沼湾の最奥部に位置する鹿折（しおり）地区は、津波に加えて大規模な火災が発生。まちの中心部に大型漁船が打ち上げられた映像は、多くの人に津波の恐ろしさを印象付けた。

震災から、約5年半。復興の進む鹿折地区を取材した。

ペットと住める災害公営住宅

気仙沼市の中心部から鹿折地区に向かって車を走らせると、右手に広大な盛土嵩上げ地が見えてくる。その中心部にそびえるのが、8棟の真新しい災害公営住宅だ。嵩上げが終わり、区画整理の進む中で颯爽と屹立（きつりつ）する姿は、復興の兆しの象徴のようにも映る。

8月に妻の彩花（あやか）さんと1歳1か月の結乃（ゆの）ちゃん、愛猫ラムと入居した佐川泰斗（やすと）さんを訪ねた。

「祖父の代からの写真館兼住居は、ちょうど大型漁船が打ち上げられた真下にありました。その後は仮設に住んでいましたが、ここは広さが倍ほどあって、持て余すくらい。明るくて本当に住み心地がいいですね」。彩花さんも「掃除は大変ですが、インテリアとかを考えるのがすごく楽しい！　結乃もハイハイのスピードが速くなりました」と笑顔を見せる。

佐川さんの住居は、ペットと一緒に住める「ペット共生棟」。外廊下にはリードをかけるフックを設けたり、ペットの転落防止用にベランダの柵の間隔を狭くするなどの工夫がこらされ、中庭には芝生のドッグランもある。「ペットは家族の一員なので、一緒に住めると聞いて、真っ先にここを選びました」と泰斗さんは語る。

この災害公営住宅の建設を担当したのがUR都市機構だ。気仙沼復興支援事務所住宅計画課の石渡直樹課長は「震災後、ご家族を亡くされてペットを大切にしていらっしゃる方が多いなかで、公営住宅でペットと住めないかという発想で作りました。ほかにも高齢者向けに、外廊下側にキッチンや食堂を設けて外から見守りができる部屋など、全部で8タイプがあります」と語る。

同じく住宅計画課の塚本恭将は「今年の12月には8棟全部の引き渡しが完了し、事業も終盤を迎えます。この事業に携わった人たち全員から良かったと言われるように、最後まで全力投球したい」と話を継ぐ。

店の明かりは、希望への灯

鹿折地区では、UR都市機構は、災害公営住宅整備事業と併せて復興市街地整備にも取り組んできた。そのなかで注目されているのが、「事業者等エントリー制度」の活用だ。これは、UR都市機構が「土地を貸したり売ったりすることを望む地権者」と「区域内で土地を探している事業者や個人」の間に入り、両者を結びつける、仲人役を担う制度。需要と供給を巧みにマッチングすることで契約のスピードアップを図るだけでなく、小規模に点在する土地を集約し、大型商業施設や工場などを誘致しやすくするなどの利点がある。

その制度を活用した第1号として5月18日に開店したのが、ファミリーマート気仙沼鹿折店だ。店長の成澤誠一さんは語る。

「このあたりは、開店前は店も何もなくて、夜はまっ暗でした。それだけに、オープン後にはお客さまから『買い物ができるだけでなく、まちに明かりがついた』と、とても喜んでいただきました」

鹿折地区に完成した災害公営住宅は復興のシンボル的な存在

ファミリーマート東北第1ディストリクト開発1課の升谷有作さんは「買い物する場のない被災地で、いち早く出店して復興を支援したい、という思いで工事を急ぎました。エントリー制度は、トータルのまちづくりの一環として出店できることに加え、URさんに間に立っていただくことで情報を共有しながら、地権者さんとの交渉も進めていくことが出来ました」と話す。

ファミリーマート開発本部建設部東北建設グループの佐久間敏彦さんも「工事に入った当初は、電気はもちろん、水も排水設備もない状態。コンクリートは水がないと固められないので、タンクで水を運ぶなどの苦労もありました。通常では工事現場に入れない段階からURさんのご協力で工事にかかることができ、最短で完成できました」と言葉を添える。

事業を担当するUR都市機構気仙沼復興支援事務所市街地整備課の栗栖大輔主査が説明する。

「事業全体としては、大規模な造成工事が終わり、地権者の方々に土地をお返ししている段階です。ようやく商店もできて生活感が出てきたところですね。今後はスーパーや金融機関なども建つ予定で、それを見て住みたい人が増えてくれるように願っています」

その働きぶりを、気仙沼市建設部都市計画課の佐々木守課長は振り返る。

「気仙沼市の職員だけでは人数もノウハウも不足するなかで、いままでのノウハウや技術をもったURの方たちが中心になって道筋をつけ、動いてくださって、それは助かりました。でも、地元の人とは言葉も違うし、戸惑うことも多かったと思いますよ。たとえば、『いいです』は『No』の時にも使われるんです。それがわからないから、記録では『了解もらいました』となっているのに、本人に確認すると『ダメだと言った』となる（笑）。そういうときは、我々市の職員が同行したり、通訳したりしましたね」

栗栖も、地元に早く溶け込むために毎週末に自転車で市内を散策、震災前の地図で以前のまちの様子を知るなど、見えない努力を重ねたと言う。

新任で気仙沼市に着任、今年で2年目になるUR都市機構気仙沼支援事務所市街地整備課の春野正成は「URに入って、こんなに現場に出て地元の方とつながる機会があることに、驚きと喜びを感じています。『これからどうなるんだろう』と不安を抱えている方が多いので、僕はその気持ちをしっかり受け止めようと、相談に乗ったりすることもあります。そういう方が、次に名指しで事務所に来てくれたりすると、すごくうれしいですね」と顔をほころばせる。

さまざまな人々の力で、復興への歩みを進める鹿折地区。前述の佐川さんも、部屋から工事が進む様子を見るのが楽しみだとか。

「2週間前に、新しいかもめ商店街にできる写真館の基礎工事が始まりました。会長の祖父は94歳なので、元気なうちに新しい店で仕事をさせてあげたいですね」

希望をのせた新店舗は、年内に完成する予定。新たなまちづくりの第二ステージへ――鹿折地区は進化を続けている。

街に、ルネッサンス
UR　UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社